安田喜憲（環境考古学者）【書き下ろし】

	段	話の筋道 ―（板書計画）	表現の仕方（気づき）	教師の活動	生徒から筆者への手紙
第五次〈本時〉	⑬	問三　文明はどうなったのか。			
	⑭	＝主食のタロイモやバナナの栽培が困難→表層土壌が流失（理由）→森の消滅（原因）→船を造れない（理由）→食料危機＋部族間の抗争が頻発⇐イースター島の文明は崩壊した。	「豊かなヤシの森」→森を豊かなものとして表現している。 「豊かな表層土壌」→森によって育まれる豊かな土地を想起させる。		
	⑮	答　イースター島の文明は崩壊した。（モアイも作られなくなった）	「千体以上のモアイの像を作り続けた文明」→豊かで高度な文明を連想させる。	・筆者の論展開の流れをさかのぼりながら説明することで、理由を述べさせる。 ・席の近くの者同士で実際に練習をさせた後、数名に発表させる。 ※板書をもとに、必要な言葉を補いながら筋の通ったまとめができることを価値づける。	・ポリネシア人はヤシの木を増やさなかったのか ・なぜポリネシア人なのに部族があるのか。 ・全員死んでしまったのだろうか。
	⑯	イースター島のこのような運命は、私たちにも無縁ではない。（意見）⇐人口増加→森林消滅→食糧危機→崩壊	「イースター島の運命」→イースター島の崩壊を悲劇ととらえている。	（主発問②）イースター島の文明の崩壊と、わたしたちが関係がある理由を説明して下さい。	
	⑰	イースター島でモアイの文明が繁栄した背景には島がヤシの森で覆われていたことが関わっていた。しかし、森が消えた後文明は崩壊した。	「日本列島文明が繁栄してきた背景にも」→イースター島についての説明は省いてあることがうかがえる。	・イースター島と日本列島の共通点に目を向けて考えさせる。 ・自分の考えをノートに書いた後四人グループで話し合いをさせる。 ※イースター島と日本列島の共通点を見いだして説明していることを価値づける。	
	⑱	日本列島で文明が長く繁栄してきた背景にも国土の七〇パーセントが森で覆われていることが関わっている。 だからもし森が消えたら崩壊が待っているかもしれない。 ＋地球そのものが森に支えられている。（森＝生命線） 絶海の孤島　広大な宇宙にぽっかり浮かぶ地球	「地球そのものが森に支えられている面もある。」→地球を支えているは森だけではないことを表している。	（主発問①）筆者の主張に大変説得力があるのはなぜですか。	
第六次	⑲	地球始まって以来の異常な人口爆発（例）＋イースター島の二倍のペース（理由） 人口が八〇億を超えたとき食料・資源不足 二十一億ヘクタールで生活できる人口は八十億人（根拠） 地球の農耕地は二十一億ヘクタールが限界（根拠）＝	「異常な人口爆発」「異常な時代」→すでに地球規模の明崩壊に向けて条件がそろいつつあることや、人口爆発の危険性を表している。	・自分の考えをノートに書いた後四人グループで話し合いをさせる。 ※言葉の選択や論の進め方などの表現の仕方に注目した発言を価値づける。	・人口を増やさないようにしないといけないな。 ・驚いた。イースター島のようにならないようにしないといけない。 ・怖い。いやだ。 ・びっくりした。 ・人類は滅亡するのか、悲しい。 ・心配だ。 ・どうすればいいのだろう。 ・自分たちで食い止める努力が必要だ。 ・森が一番大切だ。 ・モアイは関係ないように見えて、すごく大切なことを教えてくれている。
	⑳	地球の森を破壊し尽くしたとき待っているのは飢餓地獄 どこからも食料を運べない。 今ある有限の資源を効率よく長期にわたって利用する方策を考えなければならない。（主張）⇐	「飢餓地獄」→危機感を募らせる言葉 「有限の資源」→第一はやはり森林資源をさしているであろう。	（主発問②）更に詳しく筆者に聞いてみたいことや、書かれていなかったのでわからなかったことなどはありませんか。	

分析結果
○科学的根拠に基づく事実や歴史的事実をふんだんに用い説得力のある文章になっている。何よりも森林の重要性を、読者（生徒）に伝えたいという筆者の熱い思いが、言葉の端々から感じられる。
○論の展開も一貫性があり、主張につながる事実のみを用い、テンポよく結論に導いている。
○森の重要性をはっきりと伝えるために、環境を支える他の要素についてはほとんど触れられていない。他の要素との関係を考えたくなる生徒がいるかもしれない。

授業構想
◎◎内容を読み取らせながら、表現の工夫にも意識がむくような発問や板書を工夫する。
◎◎論展開の中で詳しく語られていない内容を補いながら読み進める活動を通して、作品を外から眺めたり、筋道を立てて物事を考えたりする姿勢を身につけさせる。
◎◎グループでの話し合い活動や全体での発表を通し、根拠に基づいて自分の意見を述べる練習をさせる。
◎◎筆者の論理的な思考の道筋をたどらせることで、順を追って物事を積み重ねるように考えることを追体験させる。

第一次…全文を通読し、筆者へあてた手紙を書く。
第二次から第五次までは本文を読み、内容と構造を把握した後、筆者が詳しく述べていないことを補って考えたり、筆者の思考の道筋をたどらせたりする。
第六次…内容と構造を把握した後、表現の仕方の効果を確認したり、筆者の論の進め方を検証したりする。